

# ジョン・デューイと教師教育の改革

—シカゴ大学時代の取り組み—

小柳正司  
(鹿児島大学)

## はじめに

ジョン・デューイ (John Dewey) が教師教育に直接関わったのはシカゴ大学時代（一八九四年～一九〇四年）である。彼は哲学科主任教授を務めるかたわら、教育学科 (Department of Pedagogy) の整備拡充と小学校（実験学校）の経営に携わったほか、大学拡張部で現職教員向けの夏期講座を担当したり、当時フランシス・パークー (Francis Wayland Parker) が校長を努めていたクック郡師範学校で教職科目の心理学を非常勤で教えたりした。

しかしながら、この時点でのデューイは通常の教員養成にはほとんど関心をもっていなかった。彼の関心はもっぱら現職教員を対象とする教育専門職養成に向けられていた。

ところが、パークーを指導者とするクック郡師範学校の教員団が一九〇〇年に私立のシカゴ「教員養成」学院 (The Chicago Institute of Pedagogy and Arts) に移り、翌一九〇一年にはそのシカゴ学院がシカゴ大学に編入され

てシカゴ大学教育学部 (The University of Chicago School of Education) となり、やがて翌一九〇一年にはパークーの死去により、デューイが後任の学部長 (Director) となつた。彼は学部長に就任するや教育学部の組織改革に取り組み、自分の教育学科とその管轄下にあった附属中等学校 (The University Secondary School) を教育学部に統合して、いよいよ総合的な初等・中等教員養成機関を作り出そうとした。

結局、デューイの教育学部改組計画は、クック郡師範学校以来パークーと行動とともにしてきた教育学部教員団との根深い対立と相互不信を引き起こすこととなり、デューイ自身がシカゴ大学を辞職した結果、頓挫してしまつた。

シカゴ大学時代のデューイによる教師教育への関わりを素描すればだいたい以上のようになる。本稿では、これまであまり知られることなかつたシカゴ大学時代におけるデューイの教師教育の構想を資料に基づき再構成して提示

することにしたい。

### 一 シカゴ大学教育学科の発足

一八九四年一一月、デューアイは次年度（一八九五—九六年度）の哲学科の計画を説明するためハーパー学長と会見した。シカゴ大学哲学科は心理学と教育学をあわせもつ複合学科となることが予定されていたが、この会見で学長は独立の教育学科をつくることと、主任教授にデューアイを充てることを約束した。その上で、デューアイの要望を入れて教育学科に実験学校を設置することも認めた。デューアイは、この会見での学長とのやり取りを後日妻アリスに手紙で報告しているが、それを見ると当初のハーパー学長の構想では、教育学科はカレッジとハイスクールの教員養成を目的とするもので、そのためには「教授法の教育」とモデル校での教育実習が主たる任務になるものであった<sup>(1)</sup>。おそらく、これは学生たちの就職先として中等レベル以上の学校教員を想定していたためであろう。これに対してデューアイは、主として現職教員を対象にして、教育長（superintendent）などの教育専門職養成を目的とする教育学科を構想していた。彼は、シカゴの現職教員の間に師範学校の教育に飽き足らず、大学レベルの教育を求める大きな需要があることをよく承知していた<sup>(2)</sup>。そして、デューアイのこの構想に対して、ハーパー学長も大学経営にプラスになると判断した。こうして、両者はシカゴ大学教育学科をたちあ

げるに際して、師範学校の領分である初等教員養成は考慮の外に置き、ねらいを中等以上の教員養成と現職教員向けの教育専門職養成に置いたのである。

しかしながら、妻宛の手紙を見ると、デューアイ自身は初等教員養成はもとより中等教員養成にも関心がなく、彼の関心はもっぱら教育専門職養成に向けられていたことがわかる。このことは教育学科に設置されることになった実験学校の性格を理解するうえでも重要である。実験学校はたとえ初等段階の学校であつたにせよ、目的としては教育理論の実験的研究にあり、教員養成のためのモデル校や実習校とは根本的に性格が異なることは、後にデューアイがしきりに強調するところである。

教育学科が正式に発足したのは一八九五年の秋学期（一〇月開始）からである。一八九五—九六年度版『シカゴ大学年次記録』の中に「教育学科」の記載が初めて登場し、そこでは教育学科の主目的を「教育上の諸問題を広範かつ科学的に取り扱う有能なスペシャリストを養成すること」と説明している<sup>(3)</sup>。つまり、主目的は教育専門職の養成にあり、通常の教員養成は目的にしていない。

### 二 総合科学としての教育学と教育専門職養成

デューアイは、シカゴ大学が毎週金曜日に発行する『大学広報』の一八九六年九月一八日号と九月二十五日号の二回にわたって「大学の学問としての教育学」という論文を発表

した<sup>(4)</sup>。その趣旨は、これまで教職志望学生向けの教科にすぎなかつた教育学を大学の正規の学問として確立する必要性を訴えることであつた。

ここで誤解してならないことは、教育学を大学の正規の学問として確立せよというデューアイの主張は、単に教育学の学問的な地位向上を求めるための主張ではなかつたことである。彼の主張の背景には学校教育の普及にともなつて、特に都市部ではもはや従来の慣例・慣行では処理しきれないとほどに教育行政が複雑化し肥大化していた時代状況があり、また産業技術の発展にともなつて中等・高等教育では旧来の古典的な教養教育の伝統が崩れ、初等教育においてももはや初步的な3Rsの教育だけでは間に合わなくなり、教育内容の大規模な再編と初等・中等・高等を貫く各学校階梯間の接続関係の整備といった課題が生じていたのである<sup>(5)</sup>。そうした中で、教育界の各方面で指導的な役割を担う人々に高度な専門教育を提供する社会的な必要性が生じていたのである。

デューアイは、研究大学の教育学科は教育専門職の養成を主たる目的にするものであつて、学校教員の養成・訓練を目的にするものではないことをしきりに強調している。後者は従来から師範学校が担つてきた役割であり、大学はそれに取つて代わるのではなく、新たに教育専門職の養成に取り組むべきだというのである。実際、シカゴ大学教育学科の学生は、その大半が師範学校の卒業者やキャリア・アッ

プをめざす現職教員、あるいは一般の教員を現場で指導する立場にある校長や指導主事 (supervisor)、教育長、そして師範学校ないしカレッジの教育学の教員といった人たちで占められていた<sup>(6)</sup>。

シカゴ大学教育学科は、ハイスクールを卒業したばかりの初学者を対象に教育理論を教えたり教授法の手ほどきをしたりする師範学校とは明らかに性格を異にしていた。そこでは既に一定の教職経験を有する人たちを対象に、理論の教授よりも理論の生産に力点を置き、学生たちは「教育学上の発見や実験」というオリジナルな研究に従事することが求められた<sup>(7)</sup>。彼らには、日々の仕事に追われる学校現場の教員と大学における最新の研究成果とを仲介する実践的研究者となることが期待された。それは、理論を実践に適用し、理論が実践を導く指針としてどれだけ有効性をもちえるかを検証するという意味で、文字通り教育上の「実験」に従事する研究者となることを意味した。

デューアイが実験学校は教育学科に付設された実験室であり、それは物理学や生物学の実験室と同じ役割を果たすと論じているのは、こうした文脈においてである。実験学校の開設には、教育学を研究大学にふさわしい「実験科学」として確立することとともに、一般の教員養成を超えた高度な教育専門職養成に着手しようとするデューアイのみなみならぬ意図が込められていたのである。

### 三 シカゴ大学教育学部の教員養成カリキュラムの改革

シカゴ大学に編入された当初の教育学部は、それまでのシカゴ学院の体制をそのまま維持していた。一九〇〇一〇年度『シカゴ大学年次記録』を見ると、翌年度に発足する教育学部の入学要件は原則としてシカゴ大学ジュニア・カレッジ（学士課程一、二年次）の入学要件を満たしていることとなっている。そして、一年間で小学校の教科に関する連した科目（「初等物理」「小学校アメリカ史」「木工・金工」等々）と心理学および教育学関係の科目を学び、卒業者にはディプロマが授与されるとなっている<sup>(8)</sup>。ということは、教育学部はシカゴ大学本体のジュニア・カレッジと同格の位置づけをもつ二年制の初等教員養成機関として出发したということである。

ところが、翌一九〇一—〇二年度『年次記録』では、初代教育学部長のパーカーの死去とデューアイの教育学部長就任により「教育学科の学士課程開設授業は教員スタッフとともに教育学部に移され、シニア・カレッジの開設授業と関連づけて中等学校教員養成の授業科目を開設できるようになつた」と書かれている。しかし、中等教員養成向けの授業科目は「現時点ではまだ開設できない」と書かれている。一九〇一—〇三年度の教育学部のカリキュラムは依然として初等教員養成向けであることが明記されている<sup>(9)</sup>。そして、従来の「二年コース」（Two Years' Course）に

加えて「三年次」（Third Year）と「特科コース」（Special Courses）が新たに設けられることになつている<sup>(10)</sup>。「三年次」は通常の「二年コース」をさらに一年延長して履修するものであり、「特科コース」は「二年コース」について専門を深めるためのコースである。要するに、デューアイが教育学部長に就任した一年目（一九〇一—〇二年度）の教育学部のカリキュラムは、従来の二年制の初等教員養成課程を基本にして、それに「三年次」と「特科コース」を加えることになつたが、中等教員養成コースの設置はまだ予定段階にあつて実現されていないことが確認できる。

そうした中、デューアイは一九〇二年一月一日にハーパー学長と教育学部の将来計画について話し合い、教育学部の「水準引き上げ」で合意している<sup>(11)</sup>。「水準引き上げ」とは、教育学部のカリキュラムをジュニア・カレッジ相当からシニア・カレッジ（学士課程三、四年次）相当にすることである。年明けの一九〇二年一月二九日付の手紙でデューアイはハーパー学長に教育学部のカリキュラム改革について以下の四点を提示した<sup>(12)</sup>。

① 教育学部の正規学生 (classified student) の入学要件が一九〇三—〇四年度以降シニア・カレッジ相当に改められるため<sup>(13)</sup>、ハイスクール卒で入学してくる非正規学生 (unclassified student) 向けに一年間の予科課程を置くことにする。

②大学に入学してから教員養成の専門教育を受けることとを希望する学生のために、ジュニア・カレッジに教員志望コースを設置する。

③現在おこなわれているような初等教員養成と中等教員養成の間の区別をなくしていく。初等と中等という分け方よりも全科 (general) と専科 (specialized) という分け方にする。こうすれば、手工、美術、音楽など、初等教員養成と中等教員養成という区別に根拠のない教科にも対応できる。

④研究職博士号の Ph.D. や区別して専門職博士号として Ed.D. を新設する。もしコロンビア大学ティーチャーズ・カレッジがわれわれと一緒に Ed.D. を新設してくれれば、この学位は世間に認知され、法律や医学の分野と同様の専門職学位が教職の分野にも認められることになるだろう<sup>14)</sup>。

#### 四 教育学部の新体制（一九〇三—〇四年度）

シカゴ大学教育学部は、デューイの学部長就任二年目の一九〇三—〇四年度から、それまでのジュニア・カレッジ相当の初等教員養成学部からシニア・カレッジ相当の初等・中等教員養成学部へと体制を大きく変えることになった。

一九〇一—〇三年度『シカゴ大学年次記録』では、まず教育学部の一般的な説明として、それまでの初等教員養成に加えて一九〇三—〇四年度からは中等教員養成もおこなうことが明記されている。入学要件も前年度までの「原則

としてシカゴ大学ジュニア・カレッジの入学要件を満たしていること」から「少なくとも四年のハイスクール課程の上に一年間の学業を修了している」とに変更され、「この一年間の学業はカレッジでもよいし教員養成学校でもよい」となっている。これは、大学入学後に教職をめざす者、あるいは師範学校二年課程を修了後さらに高いレベルの教師教育を受けようとする現職教員を教育学部に受け入れることを意味している。そして、卒業時点で修了者に A.B. (Bachelor of Arts), Ph.B. (Bachelor of Philosophy), S.B. (Bachelor of Science), または Ed.B. (Bachelor of Education) の各種学士号のうちのいずれかが授与されることになっている。ちなみに、前年度までは教育学部では学士号は授与されず、「一年コース」または「三年次」を修了した者に教育ディプロマが授与されるだけであった。カリキュラムも大幅に改訂されて、次の三種類の履修コースが設置されることになった<sup>15)</sup>。

##### I . 芸術・技術コース (Courses of Arts and Technology)

##### II . 全科コース A (General Course A)

##### 全科コース B (General Course B)

##### III . 中等学校教員および師範学校教員志願者向けコース (Courses Preparatory to Teaching in Secondary and Normal Schools)

このうち「全科コース A」は従来と同様にジュニア・カレッジ相当の一一年制の初等教員養成コースであり、前年度

までの「二年コース」を引き継いだものである。修了時に学士号は授与されず、ディプロマのみが授与される。このコースは一九〇三一〇四年度限りで廃止されることになつていて、一九〇三一〇四年度以降の入学者には適用されない。

「全科コースB」は一九〇三一〇四年度入学者から適用される初等教員養成コースである。上記の「全科コースA」と同じく一年間で学ぶコースだが、こちらはシニア・カレッジ相当のコースであり、ハイスクールを卒業してカレッジ段階（師範学校、教員養成所も含む）を二年間履修した者を対象とし、修了時にディプロマと教育学士号（Ed. B.）が授与される。一九〇四一〇五年度からは「全科コースA」が廃止されて、このコースが教育学部における正規の初等教員養成コースになるわけである。

「中等学校教員および師範学校教員志望者向けコース」は、シカゴ大学のジュニア・カレッジを修了した者を受け入れ、中等学校のいずれかの教科に対応した専門教科をシニア・カレッジで学ぶとともに、その教科の教授法に関する科目を教育学部で学ぶようになっている。このコースでは、履修した専門科目に対応して、A.B.、Ph.B.、S.B.のいずれかの学士号が大学から授与され、同時に教育学部から教育ディプロマが授与される。

最後に「芸術・技術コース」は芸術と技術に関係する専科のコースである。このコースは一年課程で、四年間のハ

イスクールを修了した者と、二年以上の教職経験をもつ者を対象とし、学士号は取得できない。履修案内では「既にかなりの程度の専門技能をもち、特殊な素材や道具、器具、楽器などに精通しているのでなければ、いずれの専科でもやっていくことはできないだろう」と記されており、特に「音楽」では一年間の音楽教育を受けていることが入学条件とされ、「絵画」と「塑像」では三年間美術学校で学んだ程度の技量を有していることが入学条件とされている。また、「木材加工」と「金属加工」では手工ハイスクールの卒業者が入学に有利であることが明記されている。このようにこのコースでは、現職教員や音楽学校、美術学校、工業技術系学校等の出身者のうちで、専門技能にある程度習熟している者を対象に、非アカデミック教科のいずれかに特化した教員養成をおこなう。

## 五 実験室の方法による教員養成

以上のような組織改革を進めるうえで最大の障害となつたのは、教育学部長のデューアイと教育学部教員団（faculty）との対立である。教育学部教員団といつても実質は旧シカゴ学院の教員団であり、彼らは教育学部と附属小学校の教員からなっていた。教育学部教員団とデューアイの対立が表面化した直接のきっかけは、二つの小学校（すなわち、教育学部の附属小学校とデューアイの実験学校）の統合問題である。当初、教員団は統合に賛成したが、統合

後の校長に実験学校長であるデューア夫人を充てることと、附属小学校の教員給与引き下げおよび一部教員の解雇が統合の条件となっていることを知るにおよんで、猛然と反対に転じた。結局、ハーパー学長の仲介で妥協が図られ統合は形のうえで実現するが、これ以後デューアと教育学部教員団との対立はデューアのシカゴ大学辞職に至るまで解消されることはなかつた<sup>19</sup>。

こうした両者の対立の背後には、管理職と教員団という立場の違いに加えて、実は教員養成をめぐる根本的な考え方の違いが存在していた。

ハーパー学長はシカゴ大学創立十周年にあたつての学長報告の中で「結局のところ、実験室の方法 (laboratory method) は教育問題の解決に新局面をもたらすばかりでなく、同時に教員養成のすぐれた方法でもあることを証明するであろう」<sup>20</sup>と述べた。ハーパー学長のこの報告は、デューアが教育学部長に就任した後しばらくたつてからなされたものであり、デューアが新学部長として「実験室の方法」をいよいよ全面的に教員養成の分野に押し広げることを、いわば大学の基本方針として学長自らが支持していったことを示している。

それまで教育学部ではモデル・スクールの方法、つまり附属小学校での教育実習を中心とした範例教示による初等教員養成がおこなわれていた。それは、パークーというカリスマ的な指導者の薰陶を直接受けた有能な教師たちに

よる徒弟訓練に近い教員養成のやり方であった。デューアは、こうした師範学校型の初等教員養成ではなく、大学の実験室の方法を教員養成の分野に導入し、それによって実験的な研究者の態度をもつて日々の教育実践上の諸課題に取り組む教員の養成を考えていた。それは、今日「反省的実践家」(reflective practitioner)と呼ばれるタイプの教師の養成をめざすものであつたと言つてよいだろう<sup>21</sup>。教職を経験や勘がものをいう職人芸(craftsmanship)の世界から、教育心理学や教育社会学などの教育諸科学の成果に裏打ちされた専門職 (profession) へと引き上げること。それがデューアのめざす教師教育の方向であつた<sup>22</sup>。

こうした中で、彼は二つの小学校、すなわち教員養成のためのモデル・スクールとしての附属小学校と教育理論の実験的研究をおこなう実験学校とを一つに統合して、ここに「実験室の方法」による初等教員養成という新たな試みに挑戦する実習校をつくり出そうとした。ところが、こうしたデューアの教員養成改革の理念とそれに基づいた二つの小学校の統合計画は、教育学部教員団には十分に理解されなかつたようであり、それどころか彼らが故パークーとともに長年にわたつて築き上げてきた初等教員養成の実践とそのモデル・スクールをないがしろにするものだとさえ受けとめられたのである。

## 六 教育実習の改革

学部長のデューアイと教育学部教員団との対立は、教育実習の改革をめぐっても生じた。一九〇三年四月、デューアイは教育実習の抜本的な改革を提案した<sup>45</sup>。その内容は、小学校の全教科にわたって満遍なく実習をおこなうこれまでのやり方をやめて、三ないし四教科に集中して実習をおこない、一つ一つの授業の準備にじっくり時間をかけ、教材研究をしつかりおこなえるようにして、実習の効果を高めるというものである。そして、実習指導の責任主体を附属小学校の担任教員（Grade Teacher）から学部の教科教育専門教員（Departmental Teacher）に移し、附属小学校の担任教員は実習指導の補助を務めることにする。こうした措置は、基本的には、これまでのモデル・スクール（附属小学校）での実習を中心にする了弟訓練型の教員養成を、学部での専門教育を中心にする教員養成へと切り替え、教育実習はそうした専門教育の一環としての授業研究という形に位置づけなおすことを意味していた。

だが、これまで教育実習の指導にあたって中心的な役割を果たしてきた附属小学校の教員たちにしてみれば、自分たちがこのように脇役に位置づけられることは相当強い抵抗があったであろうし、パークーの指導のもとで初等教育の革新を進めてきたモデル・スクールの教師としての彼らのプライドも相当傷つけられることになつたであろう。

デューアイによる教育実習改革は、彼がハーパー学長の協

力のもとに進めようとした教育学部全体の組織改革の一部をなすものであった。ハーパー学長は、先に紹介した大学創立十周年にあたっての学長報告の中で、「当初の教育学部の教育は限定的なもので、おそらくは元来師範学校でおこなわれていたようなものに従つてゐるけれども、大学といふ新しい環境のもとでは必然的にもつと高度で広範囲な教育が要請される」と述べている<sup>46</sup>。そして、大学における教員養成のあり方にについて触れ、これから教員養成においては教育学部と大学の各専門学科（Departments of the University）との連携を強化し、教育学部の学生が可能な限り多くの機会に大学の専門学科で履修できるよう教育学部のカリキュラムを改変することを訴えている。そこには、大学の教員養成は師範学校でおこなわれているような通常の教員養成ではなく、教育現場の各分野のスペシャリストの養成、つまり教育専門職養成をめざすべきであり、そのような質の高い教員を養成するためには、いかに教えるかという方法・技術に重点を置くよりも、教師自身の実践的知力（actual knowledge）の教育に重点を置くべきだという「大学における教員養成」についての学長自身の考えが投影されていた。

こうしたハーパー学長の考えはデューアイの考えでもあった。デューアイが教育実習を範例教示による了弟訓練型の実習ではなく、「実験室の方法」に基づいた「反省的実践家」の養成をめざすものに改めようとしたのも、要は、ユニバ

シティの中の専門学部（プロフェショナル・スクール）としての教育学部は、ハイスクールを卒業した初学者を対象にするのではなく、学士号取得をめざす大学生、あるいは既に師範学校を卒業してある程度の教職経験を有している者を対象にして「大学における教員養成」をおこなうべきだと考えたからである。それは、一般的の小学校教員を教育現場で指導する立場にたつ初等教員の養成、つまり教育専門職者の養成と、中等学校教員の養成、および師範学校やカレッジの教員など中等レベル以上の教員養成に主眼に置くものであった。

しかし、クック郡師範学校以来、長年パークーの薰陶のもとで初等教員養成に取り組んできた教育学部教員団にはそのようなことは容易に理解されなかつたし、むしろ彼らには受け入れがたいものとさえ感じられたのである。

### おわりに

以上のようなデューイのシカゴ大学時代における教師教育への取り組みを見ると、現在のわが国の大学における教師教育が直面している諸問題や論点がいくつもオーバーラップして浮かび上がつてくる。彼にも明快な処方箋や答案があつたわけではない。だが、「実践的知力」の育成に重点を置く彼の教師教育の取り組みには一つの主義が貫かれていた。それは、真理の探究においても、教師による教育の自由と自律性の確保においても、大学とそれ以下の学校を

区別しないということである。「教育には初等も高等もない、ただあるのは教育だけだ。」『学校と社会』で熱く語られたこの精神は、彼がシカゴ大学を去る数ヶ月前におこなった「教育学部の存在意義」と題する講演においても再度強調されている<sup>23</sup>。今日私たちがデューイのこの精神から学ぶべき点は多い。

- 
- (1) John & Morris Dewey to Frederick A. Evelyn, & Alice Chipman Dewey, November 22, 1894, John Dewey Papers, Special Collections, Morris Library, Southern Illinois University.
  - (2) デューイはシカゴに来て早々、シカゴでは現職教員向けの公開講座の需要が大きいことを知り、「かなりの収入源になる」と妻アリスに手紙で打明けてこる。John Dewey to Alice Chipman Dewey & children, September 13, 1894, John Dewey Papers.
  - (3) *The Annual Register, July 1895-July 1896*, The University of Chicago, p. 52.
  - (4) J. Dewey, "Pedagogy as a University Discipline," *Early Works 5*, pp. 281-289.
  - (5) 倉沢剛『米国カリキュラム研究史』風間書房、一九八五年、市村尚久『アメリカ六・三制の成立過程』早稻田大学出版部、一九八七年、参照。

- (6) J. Dewey, "A Pedagogical Experiment," *Early Works* 5, p. 244.

(7) J. Dewey, "Pedagogy as a University Discipline," *Early Works* 5, pp. 281-282.

(8) *The Annual Register*, July 1900-July 1901, pp. 108, 109, 350-352.

(9) *The Annual Register*, July 1901-July 1902, p. 123.

(10) *The Annual Register*, July 1901-July 1902, pp. 124-125.

(11) John Dewey to William Rainey Harper, November 25, 1902, John Dewey Papers. 「—ゞ一新堅が『—

ベニスの世界の新堅』に記述されたメモ」。

(12) John Dewey to William Rainey Harper, January 29, 1903, John Dewey Papers.

(13) *The Annual Register 1902-1903*, p. 132.

(14) 「ハーバード大学の新堅の新堅の手紙」。ロバート・マーチ・カーラー（Robert March Carver）は、専門職博士（James Earl Russell）と研究職博士（John Dewey）との間の書簡である。John Dewey to William Rainey Harper, February 7, 1903, John Dewey Papers.

(15) *The Annual Register*, July 1902 - July 1903, p. 132.

(16) *Ibid.*, pp. 133-141.

(17) ハーバード大学の諸々の組織にわたる、拙著『ハーバード実験

(18) William Rainey Harper, "The President's Report," *University of Chicago*, 1903, p. lxxxvii.

(19) 「反省的実践家」について、Donald A. Schön, *Reflective Practitioner: How Professionals Think in Action* (Basic Books, 1983) 著者、著者・著者による『専門家の知恵』佐藤学、秋田喜代美訳、文庫出版、1990年、参照。

(20) 短稿「ハーバードにおける教育実践と教職の専門性」『日本ハーバード学会会報』第三六号、一九九五年、111-111頁、参照。

(21) "Report of Mrs. Blaine's Talk with Mr. John Dewey," McCormick Collections, State Historical Society of Wisconsin, p. 12.

(22) William Rainey Harper, "The President's Report," *The President's Report, July 1892 - July 1902*, The University of Chicago, 1903, p. lxxxiv.

(23) J. Dewey, *The School and Society, Middle Works* 1, p. 55.

(24) J. Dewey, "Significance of the School of Education," *Middle Works* 3, pp. 273-284.